

## 村の老婆の歌と力

—暮らしに生きるラオス民衆の語り歌「ラム」—

虫明 悦生

## Old Woman's Songs and Their Power in the Village of Southern Laos

—Lam, Narrative Songs in Daily Lives of Lao People—

Etsuo MUSHIAKE

「この道は、私がラムを歌ってできた道なのじゃよ…。」

M 婆さん（当時 86 歳）がふと漏らし始めた。南ラオス・サワンナケート県の A 村は、メコン河支流の川岸にある洪水常襲村で、ラオスを南北に貫く大きな国道沿いにある郡庁所在地の町を起点に、そうとはわからぬ程度に少しずつ下りながら村まで延びる 10 キロほどの道は、雨季にはドロドロ、ボコボコで、平地には珍しく時間のかかる大変な行程だった。洪水時には、通行不能となることもしばしばで、また、乾季になっても盛土の崩れや大きく深くえぐり込まれた轍の修復が遅れがちで、力強く小回りもきく輪タクに大きく体を揺さぶられながら村に辿り着いていたものだ。その道が、ある年ぐっと良くなった。新たに砂利混じりの盛土がされローラーで踏み固められ、あつという間に村に着き、割安に感じていた車代が急に高く感じられ始めた。

婆さんは言う。

「2、3 年前だったか、（村出身の名士）L 氏に連れられてサワンの街に歌いに行った。『村までの道路修復を県に要望しているのだが、なかなか通りそうにない。婆さん、ひとつ歌ってこないか。道路修復陳情の歌を。』ということだった。当日集まったのは県知事、議員クラスの御偉方にドクター様方。小役人などいなかった。『道が欲しいというお前の心がいかほどのものか、その心を見せてもらおうではないか。』という御偉方を前に、わたしや歌ってやったよ。

昔貧しいA村は  
灌漑が来て楽になった…  
黄金のA村への道  
頑強な足でなかったら  
車の頭も  
人はもちろん自転車も

米がなければ うすのろチャオ鳥<sup>1</sup>  
今となっては道が欲しい  
難儀な道に 尖った岩角  
一度来ればそれっきり  
あちらへこちらへ  
バイクに車も 一度きり…

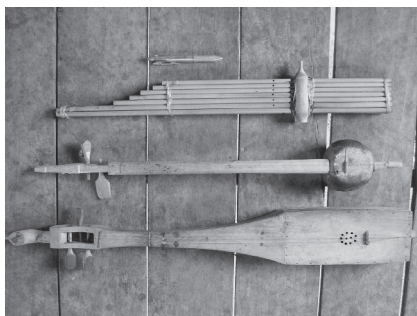
もちろん即興でその場で考えついたことばかり。歌詞が尽きるなんて、そんなことはありゃしないよ。…。」

その後、道路修復の話は受け入れられ、1年を待たずして道は新たになった。歌った婆さんも婆さんだが、彼女を連れて歌での陳情を企てたL氏、そして、歌での陳情を聞く時間を割き、話を受け入れた県の役人たちもたいしたものだ。書類と口頭説明だけでは動かなかったであろうことが、何と村の老婆の歌「ラム」で動いたわけである。当時、ラオスの人々は、その立場に関わらず、まだまだ風流や心ある訴えを解するゆとりを持っていたというわけだ。

ラオスの語り歌「ラム」は、和歌のような短い詩句を連ねながら、その場で半即興的に作られる物語を、ケーン（ラオス笙）<sup>2</sup>を中心に、木製三味線、胡弓、太鼓などの伴奏に合わせて歌い語ってゆく歌と語りの中間的な歌謡で、地域ごと民族ごとに独自のものが数多く残されている。



写真①ラムの演唱の様子



写真②主な伴奏楽器

ラオス語で「歌」を意味することばのひとつ「ペーンガ」の場合、通常メロディー

と歌詞が固定されているのに対し、「ラム」のテーマや歌詞は、準備され、あらかじめ作られたものや定番ものもちろんあるが、歌い手により、時と場合により異なっていることのほうが断然多い。歌われる内容は、面白おかしい猥談をまじえた男女の口説き合いをはじめ、掛け合いによる知恵比べ・頓知問答、儀礼時の祖霊・精霊の招き入れや送り出し、宗教の教えや死生観、土地の民話・伝説、村や地域の自然や歴史、国内外のニュース、旅先での見聞、宣伝・啓蒙、ここでも紹介した役人らへの陳情と、実に多岐にわたっている。上手い歌い手（モーラム）となると、声や節回しが優れているのはもちろんのこと、形式にのっとって韻を踏みながら、しかも内容のある詞を本当に即興で作りながら長々と歌い続けることができる。

その起源は、数々の精霊儀礼での祈りや呪文の詠唱、あるいは貝葉文書（バイランというある種のヤシの葉に書かれた古文書）に写された仏教説話や民話の読み聞かせにあると言われている。

さてM婆さん。村のモーラムでもある彼女の本業(?)は霊媒師である。ラオスでも心身の調子を崩した時は、薬を飲んだり病院で治療を受けたりするが、それでも治らなかった場合、その原因が、祖霊や自然霊、悪霊などの精霊に求められることがしばしばある。ラオスの田舎としては先進的で、街からも遠いとは言いがたいA村でも、霊媒師による病気診断治療儀礼「ヤオ」がしょっちゅう執り行われている。彼女のようにラムの歌い手・モーラムが霊媒師でもあるというのは、この儀礼の主役でもある天界の霊「ピータイ」を、この地上世界に降ろして招き入れる際、ケーンの音とラムの歌声が必要なことに起因する。



写真③ヤオ儀礼での歌い手とケーン吹き

サートゥ 手を合わせます

天上五階のテワブット様

天上四階のテワダー様

水中のトラニー様  
痛いとき熱のあるとき

やって来て診ておくれ  
やって来て診ておくれ

象の綱を座って振るカムファ様も  
精霊の綱を振るカムファン様も  
カンラー、スィダー、ノイオン様も

戻ってやって来ておくれ  
戻ってやって来ておくれ  
皆々やって来ておくれ…

早く急いでお招きしたい  
あなたの親戚兄弟が  
やって来て教えておくれ  
声を聞かせてみておくれ  
あなたの声を聞きたいの  
何を怒り 何に腹を立てているの  
親戚兄弟子供らは

やって来て ペーン  
調子を崩してどんな具合  
言付けする鳥のように診ておくれ  
九官鳥のように診ておくれ  
早く急いで 来ておくれ  
来て話して教えておくれ  
ここにこうして集っています…

脛を触ってみておくれ  
脚を触ってみておくれ

スィラー様  
リラー様

この者が終われば別の者を呼びましょう  
皆来ておくれ  
やって来て  
子らはここに集っています  
早く入って来ておくれ

情をおくれ 私のペーン  
皆おいでになって  
親戚兄弟としゃべっておくれ  
あなたのことばを聞かせておくれ  
来ておくれ ペーン

ケーンの音とラムの歌声に誘われて、天界から降りてきたピータイたちは、霊媒師である老婆に憑依し、彼女の口を通して体調を崩している本人や親族に数々のインタビューを行ってその原因を探って行く。「先週お前はどこへ行った?」「そこで何をした?」「そこにはカボック（パンヤ）の樹がなかったか?」などと病人が体調を崩す前の行動を、こと細かく聞いて行く。そのやり取りは、まるで掛け合い漫才を聞いているかのようだ。ピータイを呼び、機嫌良く診断してもらう

よう、要所々で霊媒師は特別な歌を歌い、また時々膝でドンドンと床を打つ。皿の上に立てて供えられた卵が倒れるかどうか試しているのだ。卵はいわば嘘発見器でもあり、嘘を言えば倒れてしまう。

私が同席したことのある A 村の 2 回のヤオでは、その原因は「メコン河支流の川岸のカポックの樹に棲んでいた精霊が、樹を伐り倒されて怒っている。」「潰した牛の肉の分け前に与かれなかった一族の祖霊が腹を立てている。」というものだった。

地域随一の大モーラムとはつゆ知らず、20 年近く前から思い出しては訪ねていた M 婆さんの歌をはじめとする南ラオスのラムを記録・収集する企画が、後にトヨタ財団の助成<sup>3</sup>で実現したが、それに関する活動の中でも私には、2006 年の彼女のラム録音時の様子と歌詞が特に印象深く思い起こされる。

その日の昼と夜、彼女の録音は計 4 回であった。音としては 2 回目以降のほうが断然良かったのだが、ここでは 1 回目録音時の歌詞の一部を紹介しよう。よく歌われる歌詞に比べると、やや重厚で暗鬱とした雰囲気さえ漂う歌詞ではあるが、民話、諺、暮らしのシーンを多用しながらの情景描写、また、場の状況によって気転を効かせ、それらを即興的に自在に挿入・編集しながら組み立てるストーリーの展開…と、ラムの真骨頂とも言える歌詞の一例だと言えよう。

(前半、年老いた自分の境遇や貧しく苦しかった以前の村の暮らしを、メコン河の流れに沿った情景描写と組み合わせて歌っていたが、ある時点でその内容、雰囲気さがらりと変わって以下に続いた。)

さあ子供たち お聞きなさい	物心ついたばかりの若者たちよ
私がひとつ話しましょう	聞き流す話のひとつとして
このラオスの国には	まだ小さな小さなナタがある
奴の首を切っただけで	へびの身体はばらばらになる
残るは腹の皮に	背骨ばかり
へびは死に絶え	去ってあとには何も残らず
まだここに小さな小さな石弓がある	脚 <sup>4</sup> は短く 8 ワー <sup>5</sup> ばかり

ラオスの国にはまだ小さな石弓が  
多くの国が奪おうとしても<sup>6</sup>  
〇〇おじさん<sup>7</sup> 立ち上がり  
成し遂げた 成し遂げた  
〇〇おじさん  
矢を仕掛け  
〇〇おじさん 尻狙う  
よろめくうちに矢は落ちた  
賢者が矢をとり

脚は短く 8 ワーばかり  
片脚だけでは成し得ない  
左脚も得 成し遂げた  
ああ ああ  
一握りの矢から 一本取った  
置いたは良いが 矢は振れた  
命中したのは瞞だった  
樹の枝の先  
魔法の息を吹きかけた

友たちよ 友たちよ  
よくお聞き ようく聞いておきなさい  
聞いていなさい  
忘れぬ者

小さな子らよ  
なさい なさい  
ゆっくり語るこのことばを  
忘れぬ者の 先行きは良し

考えてみてごらんなさい  
十万匹の竹食い虫<sup>8</sup>が  
大海に棲むサモ一魚<sup>9</sup>も  
もし“あのこと”がまだ  
金の柄杓も  
ガボ柄杓<sup>10</sup>は椰子殻柄杓  
それも頑丈 金の柄杓より

水中のワニを  
水に入って穴をあける  
奴らに食われ骨だけになる  
オーと言わせるなら  
割れてしまう  
ガボ柄杓は椰子殻柄杓  
それも頑丈 金の柄杓より

雷が轟き渡る 長く長く  
雷が鳴り始めたのに  
帰って来なさい

大きな雷が轟いている  
お前の姿は 見えはしない  
帰って来なさい なさい なさい

私といえは  
原っぱに  
心の置き場なく

小さなクモのようなもの  
クモの巣を張る  
赤い糸<sup>11</sup>をかける所もなく

望みといえは	そのクモの巣程度
柱に巣を張ろうとしても	柱は角 <sup>12</sup> を作りはしない
ソイ魚の投網に張ろうとしても	投げ込むたびに溶け切れてしまう
サトウキビに張ろうとしても	ラオ草になり生えてくる
川岸のラオ草に張ろうとしても	中洲のカイの木なり生えてくる
そしてそれに張ろうとしても	ああ ああ ……

外国勢力による統治や脅威、社会主義革命、下剋上のな変革、因果応報の定め等々を思わせる事柄が、いくつかの諺とともに、彼女の大好きな民話のパロディーとして歌われ、また不吉な感じや迷走感、やるせなさ…といった情感が、暮らしの些細なシーンを隠喩に見事に表現されている。

内容的にがらりと変わった歌詞で歌い始めた前述のある時点において、彼女の真意は一体どこにあったのだろうか？この歌詞に登場するナタや石弓、矢、左脚、ワニやサモ魚、竹食い虫、椰子殻柄杓に金の柄杓…は何の隠喩か？聞く者の想像力次第で実に様々な解釈が可能であり、また元になっている民話のストーリーや諺に関する知識があれば、より突っ込んだ深い解釈も可能だろう。あるいはここでとりあげた歌詞部分の冒頭で彼女が言っているように、その真意など探ることなく、さらりと聞き流しておいた方が良いのかもしれない。

ただ、これまでお会いした多くの歌手たちが常人を超える場の観察力や状況の察知力を持っており、瞬時にそれを歌にしてしまう即興力を供えていること、そして、この録音中のある時点にさしかかる頃、立ち合い・調整役であり、調査者である私や歌手たちのお目付け役でもある現地関係部局職員らの酒盛りが度を超え、録音に支障をきたすほどざわつき始めていたことは、ここに書いて記しておきたい。

あれから10年、毎年忘れたころに、M婆さんは、様子伺いだと息子さんやお孫さんを通じて電話をよこしてくれる。先日も、ケーン吹きでもある息子のK氏から電話があった。「今年は“ピータイの踊り”の年だが、良いケーンがない。前持って来てくれたのと同じ音の上質なケーン<sup>13</sup>を3本仕入れておいてくれ。」とのことであった。

「ピータイの踊り」というのは、ヤオで体調を戻した主として女性たちが1, 2年に一度<sup>14</sup>、歌手でもある女性霊媒師のもとに集い、まる一昼夜踊り明かすという儀礼だ。M 婆さんのような霊媒師は、一村に複数いることもあれば、数ヶ村、数十ヶ村に一人という場合もあるが、復調した女性たちは、自分のヤオを執り行ってくれた霊媒師のいわば“信者”のようになり、信奉する霊媒師のもとに集う。地方によって差があるが、私の知るサワンナケート県の場合、フタバガキ科のチックヤハンという樹<sup>15</sup>の花が咲き芳香を放つ3月上旬の満月の夜に集うことが多い。ケーン之音とラムの歌声、花の芳香に誘われて天から降りてきたピータイたちは、集った女性たちに憑依し、彼女らの身体を借りて踊り始める。年に一回ピータイたちに地上世界で思う存分踊り遊び楽しんでもらっておけば、彼女たちの無病息災が約束される。チックヤハンの花でいっぱいのお飾りの周りを、女性（ピータイ）たちはぐるぐる回りながら踊り歩む。合間には、人間界の様々な作業や遊びも演劇的に挿入され、それもピータイに楽しんでもらう。セミ捕り、象狩り、舟の早瀬下り、競馬、魚捕り、焼畑の伐開・火入れ・種まき・収穫…。



写真④ピータイの踊り

ラオス暦で酉年11月の満月の夜に生まれ、年頃の娘だったころ、やって来た日本兵<sup>16</sup>とことばを交わし、からかい合ったこともあるというM 婆さんは、既に96歳。30歳前から、かれこれ60数年もの長きにわたって勤めてきたヤオ儀礼やピータイの踊りの歌手兼霊媒師・モーヤオとしての役割は、娘さんに引き継がれ、一昼夜続くピータイの踊りで彼女が歌うのは冒頭と最後だけになったと、以前聞いた。2、3年前訪ねたM 婆さんは、脚を悪くし高床の家の階段の上り下りに苦勞し、耳も遠くなっていて、大きな声でしゃべらねばならなかった。しかし、あのいつもの飄々、泰然、凜としたたずまいと声の艶・張りは、100歳を間近に迎えようとする老婆のものとは思えなかった。

K 氏いわく、M 婆さん、今年も冒頭と最後、歌うとのことである。



花が香る  
チックの花の香  
ハンの花の香  
ティーの花 カッカオの花  
ペーン様 オンノイ様  
あなたはふざけ踊りたがる

芯の先の開いた花 さあ来るの  
漂い来る  
漂い来る そうでしょ ペーン  
漂い至り 鼻に香る 私のペーン  
ペンノイオンオン様 そうでしょ  
演劇遊びも見てみたい…

大観衆が見守る大きな祭のステージ前に、一人だけスタスタと歩み出た老婆を見て、彼女だけに向けた歌詞で歌い始めた歌い手と、そこに詰め込められたありがたい詞を、両手を合わせて一心に浴びていた老婆の不動の姿…。

法事や葬式のラムで歌われて蘇る今は亡き親戚の生い立ち・来歴に、思わず涙し、そうかと思えば、面白おかしい口説き合いに、大笑いしながら声援を送る法事の主催者…。客人を送り、後片づけもひと段落してラムの座に入り、イケメンの歌い手からのお世辞に奇声を上げて喜ぶまかないの親戚の娘たち…。

「良い子は毎日学校へ行き 一所懸命勉強します」と叔母の作ってくれた歌詞で歌う少女に対し、「この老いぼれは 学校なんか行きもせず 読み書きなんかできやしない」と、真摯に歌い返した近所の爺さんと、それを聞いて少しばかり誇らしげに微笑んだかに見えた彼女の顔…。

役人の立ち合いを横に、地元の聖なる地の森が、伐採され裸にされて行く様子を皮肉たっぷりに歌った若者…。

座ったまま、優雅に、時に卑猥な手つきで踊りながらにじり寄って口説き合う男女の歌い手の歌と姿に、大笑いし、手を叩いて喜んでいた美しい年頃の娘さん。身体を癌に蝕まれつつあった彼女の片脚は既に切断され、腹部への転移も知らされていた…。

難民<sup>17</sup>としてアメリカに移住した地元出身者からビデオCD制作を依頼され、村や地域の近況、遠く離れた同郷者たちへの思い・呼びかけを歌う村の



写真⑤盛り上がる口説き合いの場面

男女の歌手と盛り立て役の大人たち。踊り担当の子供たち。撮影・録音に勤しむ地元文化局職員…。

人の心を繋げるラムは、ラオスの村の実生活に今でも力強く生きている。単なる娯楽をはるかに超えて、暮らしに生きる歌の姿は様々だ。ここにあげた私がラオスで最も畏敬する村の古いぼれモーラムの歌と力は、その姿の一部にすぎない。

## 註

- 1 村人にとって、「自ら魚を取りに行くことなく、首を長くして魚が来るのを待っているだけのろまな鳥」というイメージがある。
- 2 日本の笙と同類の気鳴楽器。吹き口のある木製の胴に、金属製のフリーリードが付けられた16本の竹管が2列に差し込まれて固定したものが一般的。
- 3 南ラオスの語り歌「ラム」に歌われる故郷の風土とくらしーそこに描写される豊かな生活世界を味わうための歌詞全訳および解説作成の試みー（2006－08年トヨタ財団研究助成）
- 4 石弓は、竹や他の植物の繊維を弦として張ってしなった竹弓部分と、それと直交するように矢を置く柄部分からなる。石弓の「脚」は、しなった弓部分のこと。
- 5 「ワー」は、両腕を広げた長さ。8ワーは12～13m。
- 6 19世紀半ば以降、ラオスは、現在のタイ、フランス、日本、アメリカ、ベトナムなど、諸外国の管轄・統治下に置かれたり、大きく影響を及ぼされたりしていた期間が長い。
- 7 1975年、ラオスは王制から社会主義への革命を実現させた。○は、革命指導者で、録音時には、実名で歌われている。
- 8 ラオス語でmoot。チビタケナガシンクイムシの仲間と思われる。飯籠やお膳、箕など、ラオスでは多くの竹細工が日常生活で用いられているが、極小のこの虫に食われて穴だらけになることもよくある。かまどの上で長期間燻したりすると、この虫の防虫効果がある。
- 9 民話に登場する大魚。
- 10 椰子の殻を削りぬいた球状の椀に、木製の柄を差し込んで作った柄杓。
- 11 ラオス語ではsaai naen。赤い色のイメージが付随しているわけではないが、「運命の糸」、特に男女間を結びつける運命の糸という意味で使われることが多い。
- 12 ラオス語で蜘蛛はmaeng mum。直訳すれば、「角虫」。部屋の角など、よく角状になったところに巣を張ることから、こう呼ばれている。
- 13 職人の死去等により、長時間の演奏に耐える音色と耐久性を兼ね備えたケーンは、極度に入手し難くなりつつある。
- 14 通常、ピータイの踊りは1年に1回行うものだったが、近年、A村では2年に1回の頻度で行われている。地域や村によって、その頻度はいろいろだが、現在では、行事自体が消滅している地域も多い。
- 15 ラオスの場合、中南部平原地帯の水田中に樹がたくさん立っている景色をよく見かけるが、この水田中に残された樹に、チックやハンの樹が含まれていることも多い。
- 16 1940年、日本軍はフランス領インドシナへの進駐を開始した。
- 17 1975年の革命後から1992年頃まで、ラオスから30数万人（当時の人口の1割強）もの人々が主に難民として第3国（アメリカ、フランス、オーストラリア等）に流出したといわれる。